

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名：渡邊 祥子

本論文は、北アフリカを代表するイスラーム改革主義運動として、独立後のアルジェリアに大きな影響を与えたアルジェリア・ウラマー協会に関して、実証的総合的な考察を試みた研究である。本論文は、同協会の政治思想と社会活動という二つの側面の分析を通じ、イスラーム改革主義の思想と運動の歴史的な位置づけ、および近代国家とイスラームの関係性を考察することを目指した。その狙いの一つは、序論で示されているように、アルジェリア・ウラマー協会とナショナリズムに関する通説の批判にある。従来の通説的な解釈では、同協会がアルジェリアの独立闘争において、ナショナル・アイデンティティの形成などという文化面での補佐的な役割を演じたものの、最終的には FLN を中心とするナショナリズム運動に吸収されていったとする。これに対し、本論文は、アルジェリア・ウラマー協会の指導者たちの言説を内在的な視点から分析し、彼らがナショナリズム運動とは異なる別個の世界観をもち、政治的領域とは独特の距離認識をもって運動を展開してきた点を明らかにした。本論文は二部構成を取り、第1部（第1章・第2章）では同協会の政治思想を、第2部（第3章・第4章・第5章）ではその社会的活動を扱っている。

第1章「ウラマー協会の思想とナショナリズム」では、アルジェリアのネイション概念の基礎となった独自の集合的な主体概念「アルジェリア・ムスリムのウンマ」について論じ、この概念がフランスの植民地政策への対抗と、エジプトのマナール派の思想の影響という二つの文脈の中から生まれてきたことを論証した。

第2章「ウラマー協会における「政治」：ナショナリストへの接近と批判」では、イスラーム政治思想の伝統をふまえて、同協会がナショナリスト政党との関係をどのように認識していたかについて考察した。そこで中心となるのは、同協会が自らを「神の党」と位置づけ、ウンマを分裂させるナショナリストに対して、ウンマを統合する宗教を司るウラマーとしての優位な立場にあると考えていたとする認識である。

第3章「自由アラブ教育運動」では、アルジェリア・ウラマー協会の社会活動の一つとして教育活動を取り上げ、フランスの植民地教育制度から自立したアルジェリア・ムスリムのウンマのための自由マドラサの教育体系について分析した。

第4章「ウラマー協会の経済基礎」では、同協会の支援者の経済人の活動の分析を通じて、同協会の経済に関する理念がウンマの経済的復興を目指す経済ナショナリズムとして機能したという考察を示した。

第5章「アルジェリア・ムスリム・スカウト運動とウラマー協会」では、ナショナリストの活動とも密接な関係をもったスカウト運動に関して、同協会が政治党派を超越した立場から積極的に関わった点を考察し、第1部で検討した政治とウラマーとの関係に関する理念がこの社会活動の分野に反映されている点を明らかにした。

結論部分では、以上の分析をふまえ、アルジェリア・ウラマー協会が、植民地主義支配と独立闘争という歴史的な文脈の中で、すなわちフランス植民地主義当局およびナショナリスト政党という二重の関係の中で、国家と宗教、政治と宗教との関係性に対する独自の認識を育て上げていったと総括した。この認識の発展過程は、近代国家に対するウラマーの専門領域である「宗教」を再定義する試みであり、そこにイスラーム改革主義の歴史的な

役割を見出すことができたというのが本論文の結論である。

本論文は、フランス植民地行政資料およびアルジェリア・ウラマー協会の刊行物・指導者の著作、定期刊行物資料などの膨大なアラビア語一次資料を用いたきわめて実証的な水準の高い研究である。また通説批判に見られるように、ナショナリズムとイスラームとの関係、さらには近代国家における政治と宗教の領域の再確定などに関する問題意識も明確であり、目的とした主題の分析を越えて、射程距離の長い諸問題に対しても大きな示唆を与えた論文である。

審査委員会では、その実証性のレベルにおいて世界に誇れる研究である、先行研究のまとめ方を含め、日本のイスラーム政治思想研究の発展に大きな貢献をなした、アルジェリアの事例研究に留まらない普遍的な理論的問題提起をしている、などの高い評価の意見が示された。

その一方で一部にアラビア語資料の理解に正確さを欠くという指摘があったほか、固有名詞などの翻訳、事実関係の誤解などについて若干の問題点の指摘があった。また、内容面では多くの建設的なコメントと質問が審査委員から示された。ウラマー協会の指導者の交代を通じた思想的展開があったのではないかと、同協会の政治理念はイランのイスラーム共和国体制の先行的な政治モデルとしての歴史的意義があったのではないかと、アルジェリア・ナショナリズムにおけるベルベル問題に対するウラマー協会の態度、マナール派の影響が過大評価されていないかと、イスラーム改革主義の教育思想における訓育（タルビヤ）の重要性についての言及が必要であると、ウラマー協会の他の国々などとの比較史的重要性への言及、政治や宗教の概念の認識変化とともにウラマー概念自体の自己認識における発展はなかったかと、イスラーム世界概念の使用の問題、帰化問題をめぐるチュニジアとの比較（とくに集団的帰化と個人的帰化をめぐる問題）、協会の経済的基盤に関する説明の不足、社会運動としてのイスラーム復興運動との比較の可能性などの諸点について、審査委員からコメントと質問が出された。これらの質問に対する論文提出者の回答は、いずれも誠実なものであり、またそのほとんどにおいて論理的な議論を展開し、論文の内容のいっそうの理解を進めるのに役立った。

本論文は、そのわずかな部分に瑕疵は認められるものの、アルジェリア・ウラマー協会に関し、従来の研究水準を超えた優れた実証分析であり、またイスラーム改革主義の歴史的な位置づけや、また今日のイスラーム復興運動の研究の中心的課題である政治=宗教関係に関しても優れた洞察を示しており、学術的貢献度も高いと判断する。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。